

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22281

研究課題名（和文）向社会的課題への取り組みを促進する対人的相互作用

研究課題名（英文）Interpersonal processes promoting prosocial effort

研究代表者

Gherghel Claudia・Emilia (GHERGHEL, Claudia Emilia)

一橋大学・森有礼高等教育国際流動化機構・講師

研究者番号：00876279

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：共同社会の維持に必要な協力行動を行うよう、人々を動機づけることは容易ではない。本研究では、他者からの直接的な要請を通じて、努力を要する協力行動を促すことができるのか、また、要請の効果が人々の文化的背景によって異なるかどうかを検討した。その結果、文化を問わず、他者からの直接的な要請は協力行動を促す効果をもたないことがわかった。一方、他者に努力を期待されていると感じることは、日本においてのみ、協力行動の実行につながるということが明らかとなった。日本では、相手の期待を察知し、それに応えようとすることは協力行動を促す可能性があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、人々の利益や価値観に齟齬が生じている場合、協力行動を促すためにどうすればよいのか、個人の文化的背景の特徴を考慮に入れ、検討することを目的とした。努力を要する協力行動を促すには、直接的な要請は効果的でないことを再確認し、自己決定理論の予想を実証的に支持する結果が得られた。加えて、日本においてのみ、相手の期待に応えることが協力行動を促す動機づけとなる場合があることが示され、異なる文化的背景をもつ人々を動機づけるために、その文化的特徴を考慮した介入が必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Motivating people to cooperate with others when the costs of cooperation are high is challenging. This research investigated whether direct requests from others promote effortful cooperation, and whether the effect of requests on cooperation differs with culture. The results showed that direct requests do not promote cooperation in either the United States, or in Japan. However, thinking that others expect one's help led to more cooperation only in Japan. Reading others' minds and adjusting to others' expectation may promote effortful cooperation in Japan.

研究分野：社会心理学

キーワード：協力行動 向社会的行動 文化 他者の期待

1 . 研究開始当初の背景

向社会的行動は、共同社会を維持するために、必要不可欠である。しかし、高コストや努力を要する向社会的行動を行うように人々を動機づけることは容易ではない。本研究では、向社会的行動を促す要因として、受け手の期待に着目し、どのような状況において他者の期待に応えることが向社会的行動を促すのかについて、文化を軸として考察することを目的とした。

自己決定理論(Deci & Ryan, 2000)の観点から、他者の期待に応えるといった外部からの強制は自律性欲求を阻害し、パフォーマンスや満足感を低めるとされているが、この傾向は相互独立的な文化(例:アメリカ)において顕著であると考えられる。一方、他者の期待をより内在化している相互協調的な文化(例:日本)では、他者の期待に応えることは義務遂行とみなされ、努力や満足感につながる可能性がある(Iyengar & Lepper, 1999; Tripathi et al., 2018)。

そのような文化の調整効果は、向社会的行動を行う場合においても確認されている(Buchtel et al., 2018; Miller et al., 2011)。しかし、向社会的行動の実行意図や実行後の満足感に対する他者の期待の効果を検討したこれまでの比較文化研究の結果は一貫しておらず(Buchtel et al., 2018; Gherghel & Nastas, 2021)、他者の期待に応えることがどのような状況においてポジティブな効果をもつのかについて、より詳細な検討が必要である。

2 . 研究の目的

本研究では、送り手の努力が受け手の利益につながるような共同作業の状況を取り上げた。送り手の努力を向社会的行動とみなし、受け手の期待の効果が文化によって異なるかどうかを検討することを目的とした。本研究では、受け手の期待を直接的に明示することの効果(明示された他者の期待の効果)と、送り手が努力を期待されていると感じることの効果(知覚された他者の期待の効果)を区別し、前者に比べて、後者の方がより文化の影響を受けやすいと予測した。他者のニーズや考えを察知することが求められる日本において(Markus, 2016)、努力を期待されていると思うことがより向社会的行動を促進するという仮説を立て、検証した。

3 . 研究の方法

他者の期待が向社会的行動に与える影響を検討するために、3つの研究を行った。研究1と研究2は、シナリオ研究であり、研究3は実験研究であった。

(1) 研究1(シナリオ研究, 参加者内)

研究1のデザインは2(他者の期待:なし,あり;参加者内)×2(文化:日本,アメリカ;参加者間)であった。参加者に6つのペアワークのシナリオを提示した。明示された他者の期待の程度はシナリオによって異なり、期待ありのシナリオにおいて、受け手が送り手に努力を期待していることを直接的に伝えるメッセージを提示し、期待なしのシナリオにおいて、そのようなメッセージが提示されなかった。シナリオを読んだ後、参加者にそれぞれのシナリオの受け手が自分にどれくらい努力を期待していると思うかについて評価してもらった(これを、知覚された他者の期待とした)。また、それぞれのシナリオのような状況に置かれた場合、自分が相手のためにどれくらい努力をしたいと思うかについて評価してもらった(向社会的努力)。

(2) 研究2(シナリオ研究, 参加者間)

研究2のデザインは2(他者の期待:低,高;参加者間)×2(文化:日本,アメリカ;参加者間)であった。ペアワークのシナリオを提示した後、高期待条件の参加者には、受け手が送り手に努力を強く期待していることを伝えるメッセージを、低期待条件の参加者には、受け手が送り手に努力を期待している程度がそれほど強くないことを伝えるメッセージを提示した。研究1と同じように、知覚された他者の期待と向社会的努力の程度について回答をもとめた。

(3) 研究3(実験研究, 参加者間)

研究3のデザインは2(他者の期待:なし,あり;参加者間)×2(文化的自己観:協調的自己観,独立的自己観;参加者間)であった。研究3では、参加者にランダムに選ばれた他の匿名の参加者とペアになってもらい、参加者に送り手の役割、ペア相手に受け手の役割をランダムに割り当てられたというカバーストーリーを提示した。送り手は確実に報酬を受けられるが、退屈な課題も課され、その課題における成績によって、ペアとなった受け手の報酬が決まる仕組みであると伝えた。この課題での成績を向社会的努力の指標とした。

他者の期待が実験条件によって異なり、受け手が送り手の成績によって自分の報酬が決まることを知らない「期待なし条件」とその情報を知っている「期待あり条件」の2つの条件を設定した。研究1と2と同じように、参加者に知覚された他者の期待を評価してもらった。

文化的自己観も実験的に操作した。独立的自己観条件では、参加者に自分が他のクラスメートと異なる点について記述してもらい、協調的自己観条件では、似ている点について記述してもらった。

4. 研究成果

実施した3つの研究の結果を図1に示す。

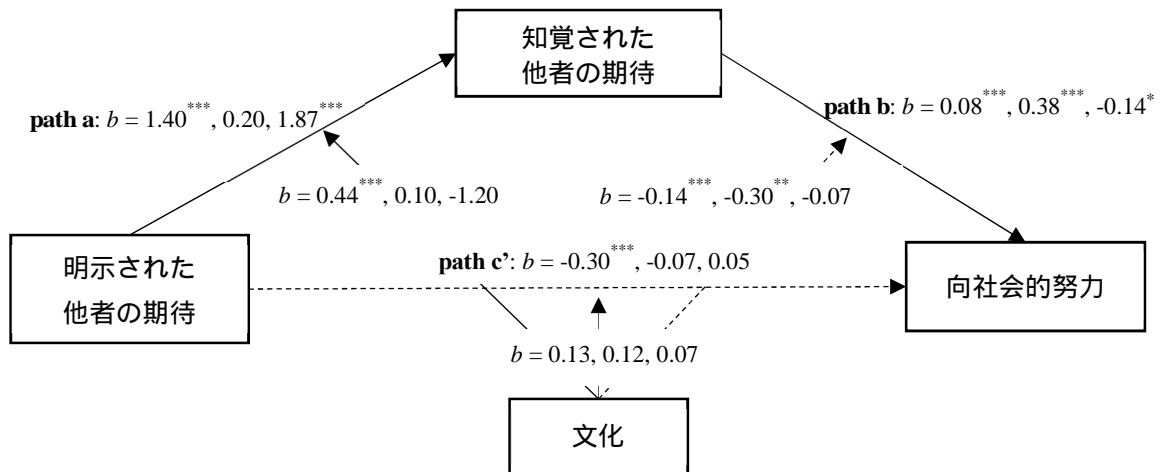


図1 本研究の結果

注) 回帰係数(非標準化)は研究1, 研究2, 研究3の結果の順で示されている。

他者の期待:【研究1】なし=0, あり=1【研究2】低=0, 高=1【研究3】なし=0, あり=1.

知覚された他者の期待:【研究1, 2, 3】他者が自分に努力を期待していると思う程度(連続変数)

向社会的努力:【研究1, 2】努力したいと思う程度(連続変数)【研究3】課題の点数(連続変数, 低スコアは高い努力を指す)

文化:【研究1, 2】日本=0, アメリカ=1【研究3】相互独立自己観(協調的自己観=0, 独立的自己観=1)

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.

(1) 向社会的努力に対する明示された他者の期待の効果(図1, path c')

明示された他者の期待は、研究1を除き、向社会的努力に対して有意な効果をもたなかった。また、文化が明示された他者の期待と向社会的努力の関連を調整しなかった。研究1においてのみ、文化を問わず、明示された他者の期待が向社会的努力に対して負の影響を及ぼした。これは、自己決定理論(Deci & Ryan, 2000)を示唆する結果であり、参加者にとって、明示された他者の期待は外的動機づけとなり、努力を低めたと考えられる。しかし、この結果は研究2と3で追試されることがなかったため、慎重な解釈が求められる。他者の期待を伝えるメッセージの内容やシナリオで描写された状況そのものが努力に影響を及ぼした可能性があり、より厳密に交絡要因を統制した上で再度の検討が必要である。

(2) 明示された他者の期待と知覚された他者の期待の関連(図1, path a)

明示された他者の期待は知覚された他者の期待に対して正の影響を及ぼし、明示された他者の期待が強い条件において、参加者はより努力を期待されていると知覚した。しかし、研究1では、この関連が文化によって調整されており、強い期待を明示されていない状況であっても、日本人は努力を期待されていると評価しやすかった。また、研究2でも、文化の調整効果が有意ではなかったものの、明示された他者の期待と知覚された他者の期待の関連は日本においてより弱く、日本人が直接的に努力するように要求されていなくても、相手のニーズを察知し、相手の期待を読み取る傾向があることがわかった。この結果はコミュニケーションスタイルの文化差を示唆しており、異文化間コミュニケーションでの誤解を解消するために、このような文化の違いに留意する必要があることを示している。

(3) 向社会的努力に対する知覚された他者の期待の効果(図1, path b)

三つの研究を通して、知覚された他者の期待が向社会的努力を促進した。しかし、研究1, 2では文化がこの関連を調整しており、アメリカに比べて、日本においてより強い正の関連を確認した。つまり、日本においては他者に努力を期待されていると思うことがよりポジティブな影響をもっており、知覚された他者の期待が向社会的行動を促進す

る効果をもっていることが明らかとなった。他者の期待をより内在化している日本人は、自分に期待されていることを察知し、それに応えるために自身の行動を統制している可能性が示唆された。明示された他者の期待は同じような効果をもたなかった結果から、直接的コミュニケーションを通して向社会的行動を促すことが難しい一方、間接的に期待を伝えることで日本人の向社会的行動が促進されることが明らかになった。他者の期待の効果を検討したこれまでの研究結果が一貫していない(Gherghel et al., 2020; Gherghel & Nastas, 2021)理由として、他者の期待が直接的に伝わったものであったのか、それとも、間接的に察知されたものであったのかという測定の違いが考えられる。

< 引用文献 >

- Buchtel, E. E., Ng, L. C. Y. Y., Norenzayan, A., Heine, S. J., Biesanz, J. C., Chen, S. X., Bond, M. H., Peng, Q., & Su, Y. (2018). A sense of obligation: Cultural differences in the experience of obligation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *44*(11), 1545–1566. <https://doi.org/10.1177/0146167218769610>
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, *11*(4), 227–268. https://doi.org/10.1207/S15327965PLI1104_01
- Gherghel, C., & Nastas, D. (2021). Effect of obligation to help on positive affect: Comparing Japan, Romania, and the United States. *Journal of Community Psychology*, *49*(6), 1617–1629. <https://doi.org/10.1002/JCOP.22608>
- Gherghel, C., Nastas, D., Hashimoto, T., Takai, J., & Cargile, A. C. (2020). Culture, morality, and the effect of prosocial behavior motivation on positive affect. *Ethics and Behavior*, *30*(2), 126–149. <https://doi.org/10.1080/10508422.2019.1651651>
- Iyengar, S. S., & Lepper, M. R. (1999). Rethinking the value of choice: a cultural perspective on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *76*(3), 349–366. <https://doi.org/http://dx.doi.org/10.1037/0022-3514.76.3.349>
- Markus, H. R. (2016). What moves people to action? Culture and motivation. *Current Opinion in Psychology*, *8*, 161–166. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2015.10.028>
- Miller, J. G., Das, R., & Chakravarthy, S. (2011). Culture and the role of choice in agency. *Journal of Personality and Social Psychology*, *101*(1), 46–61. <https://doi.org/10.1037/a0023330>
- Tripathi, R., Cervone, D., & Savani, K. (2018). Are the motivational effects of autonomy-supportive conditions universal? Contrasting results among Indians and Americans. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *44*(9), 1287–1301. <https://doi.org/10.1177/0146167218764663>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Gherghel Claudia	4. 巻 -
2. 論文標題 Inferred social expectations are linked to prosocial effort in teamwork in Japan but not in the United States	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12461	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Gherghel Claudia
2. 発表標題 他者の期待が退屈な課題での向社会的努力を促進する
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Gherghel Claudia
2. 発表標題 Social obligations and prosocial effort across cultures: The role of distinctiveness of the self
3. 学会等名 日本グループダイナミクス学会第67回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Gherghel Claudia
2. 発表標題 Perceived social expectations promote prosocial effort in teamwork among Japanese
3. 学会等名 26th International Association for Cross-Cultural Psychology Congress（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Gherghel Claudia, Hashimoto Takeshi
2. 発表標題 Helping More When It's Expected: The Effect of Culture and Obligation to Help on Prosocial Effort
3. 学会等名 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Gherghel Claudia
2. 発表標題 Culture shapes the effect of obligation on sense of choice and prosocial effort
3. 学会等名 International Association for Cross-Cultural Psychology Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関